繪本太閤記

初編

五

伊13
1866
5

へ13
1833
5

繪本古閑記 第五之卷
同 遠 孫
平手典太下論兵書
平手監物布陣営
本下冠吉郎加增
小田家藥七箇所附

羽吉郎説佐々木兼頼
江州援兵至尾州
今川義元屯桶挟間
菊田太郎代設丸根城
今川義元陣烈

尾張徳川藩蔵書之印

續本朝圍記巻之五

木下與平手論兵書

三國志諸葛亮ガ傳ヨリ曰先ヲ遂ヨ亮ヨ論ろの九三ろび往
ろ乃まろ西圍て人を席け與ヨ幸をとる收てこしを善と
情好日密なり圍ヲ張旄名ヲ
狂奥の水あるがおろ〳〵名ヲ
亟相ろにろ木下羽吉郎信長ヨ仕ろくいまぐ數年ろらさ
ヲヨ勢召の大軍を一戦ヨ追隆〳〵戸部山渕を歌のまみ
討せ其計策悪く的中〳〵ろしば信長甚悦び弥ひ先ろの
いま奥の水を得ろ小拘〳〵を憂夜席を門くしろ
軍事のこと沒じ給ふ小田家の諸士も甚驚ろ後彼の名

平手本下と
兵書を
論を

を察〳〵しも柴田佐久間両人の倫犯日ひ〻百倍〳〵爰吉
を疑〳〵そんと小田切軍学の士平手賢物と密〻に計り軍
学の兵書の問答紙をそむ此有信長卿より平を本下より仰
下知みだしが大沢を水爰吉〻向てそを全く柴田佐久間ホ
ト合せ呉下を疑〳〵めん計なり爰吉覚悟ありて我べ〳〵と
爰吉覚て我も左おもんと思ふ之平をこゝの爰学者いふ
んで某を疑〳〵そんや我〻を疑ありと黙〳〵てそをうけし
そふ去程よ信長の御前に於ひて平を本下軍学の
論あり〳〵そ小田切小のおも士席ふ湯〻くそをなく平を先
問て曰呉下武術よおひてくふ〻ある練せりと雖及つり兵書
の旨よ通じぬるや試よ軍法を論せんと〳〵爰吉言て某

不学ふつ〳〵兵書紙数〳〵を平をよ曰ま軍中よねうる者い
抱まで兵書紙繙じ陳列を布進退を尽して中而后戦
へで必勝討ん必破呉下兵書を読ぎて爰よ連戦ひの
論をそれ頗る小頭の戯よして近〳〵爰吉曰孫子もいひぬや
兵法陣法強弱変変よ如ひく味方其ひ法をふて陳を布い
敵も手ひ練て変〳〵変よ変ふて向ふぎ〳〵陳をつゝ行給へを云る
も某兵書紙読ぎそ〳〵ふて紀とるをふて良ねこいふ〳〵ひ
強敵をも能碎くるのを知〳〵平を曰呉下猥りに練兵変
爰の説をなせども手ひに練兵変爰ふ変ぎるい兵書の趣よ
もつく呉ま孫子も兎と宮日陽しとせん況や呉下に於ける

令

平手にて盗物を陣営を布く

木下
秀吉
ふぐりを加増

や时よ佐久间信盛怒って曰不注意書を知らざる義吾論
い玉ふ能く能く無意の災悟刀ん掴〳〵と諫よ陣法をつゝ称まい
守破の功をなしてよ後よ後ろ
をして清洌の外曲輪よ抽ひく陣法を戦〳〵む

平手監物布陣嘗

去程に本下平左衛門丈吾を惣よ百人よ行殿行刀を指せ
鉄炮よ玉込迄ど矢よ根を放ち仮よ戦ひの旅さを改を先平を
士卒こ下知〳〵て一陣をつゝ称陣形よ出ゝく義吾郎此陣を知
ふるやとゝ義吾も同じく進ゝ出て知らしと言平を大に
笑て兵い掃ふ心底ぶ多くて布ふる菊水の陣ゝ海陣名の名ゝ
もつぶして雑兵を破り得んや義吾言て我其名い知らざれ

ども破るの術知ふ呉下法ゝよ能守り〳〵今打破りて
見せやさんと我後の周よ入ふ大沢自水流壮弥ゝ湧よ名
百騎をふうちなゝ左右よ後へ自三百騎をふて心面ふ向よ
平左ぶ陣い五をはつよふうち第後左右とし第門より後門ゝ
義吾が三百騎第門より進んで陣中へ突く入る平をぶ門
戸忽ちに変じ左右の後へ義吾が後を討ふ包ん
とする和を浅野大沢左右よ別も義吾が戦ひよ因もはま
平をぶ後陣へ返三百騎を突ふれが義吾ぶ三百騎後へとろと
しふ第後よ出ゝてりこゝゝゝ布つゝ称ふ菊水の
陣そふりくと解く敗走を

本下義吾郎知ふ加増

梶原右之一陣を布き陣前に出く我陣を窺ふやうやうこゝ
辛き進よ梶原が陣と見渡し～よを笑ひ兵を名
の陣と梶原が曰兵もの楠の周ひ狭ひ～蔓水の陣なるぞ
呉下此陣を破り得んや辛き梶原右の嘲嗤せられ大よ憤
り五百人を一組へと～呉一突に討てう於梶原右が結へ先陣
後陣二手よ組へく扣へ～が先陣突立られまごゝになんて
うろしが辛き得さうと短兵急よ揉立うぞ梶原右郎が
後陣組を開き味方を引入を毎よ楯よ狭間をひらき
弐ツ又放つ十放つけが内を石て引ね合せ忽ちして城郭の
おく～前後左右よ石ひ～辛き雨波と發～まく～と進ミ
寄辛き大よ驚きうが兵悲なく力戦～て実彼を士辛と

下知～てそげ～く討ん件の楯の狭より弓矢鉄炮を雨乃
おく～村出～面を向べき楯もなく～辛き彼梢をうん
又へうる家を彼梢塀をうんと開き始め伐り裏うる二百
余人面もふらで突出に前辛き各々今ん叶ひじと散く～み
敗北を大将分もで突出に前辛き各々今ん叶ひじと散く～み
腎～ハ吟も止さるけり辛き各々を監物並ての兵悴大にお遠し
梶右が出没進退鬼神のおく～ぬく～感服～何損易業
の業よあらじと偏執の心を散ド終よ梶右が組下とゞまりて
芸よ軍勇を沸ぜんとを信長卿弟に愛悦び給ひ梶右
が勇智無家の寄密よ達～敬度の計策憲く思ら従と
云ふ已実よ我家の柱石称ふんがみべうぞ貴乃

信長七ケ条を岩谷築く

の御加増みて郡令ら五百貫老臣同前の格よ仰付らるゝ
む丹羽池田森林等若の御引ひ立くくをみべ〳〵と若て
励ひ勇ミ々る軍を重て辛ら陣物をさゝし後若に労うを
嫉妬の念もなく本下が組下ら斗りて忠を励む時世妙乃
志感歎おく〳〵心を合せ国家の盛栄を計るべし
とかぞ〳〵引出物を給りくさんが本下辛をみ雖く恩を謝
〳〵御前ら退きぐ

信長桑七箇所之砦

永禄三年の春三月より暮の始ら迄で今川勢攻来る
と風聞せ〳〵ど今よ迄て兵を集さず林森柴田ら強く
陣を進めくさんも若一人敵て出ざりと世ど

信長も之を深く悔とし〳〵給らび給ふ元後一変〳〵て今川乃
大勢を引受運を天にまかせ雌雄を決べしと評義定
くさんが敵下て云義元大軍うて攻来る味方小勢を以て当らん
も強ち給へを恥べし先鳴海の通り警津丸根丹下中島
ら乃の切所ら七ヶ所の砦紙築二百騎三百騎の勢を籠置さ
敵の大軍を引ち小勢と見ぬ〳〵て戦ひ給人数の勢を以味方
の勢ら疑ひべ二十倍ら多るべ〳〵さんが何ぞ此砦紙攻ら
悪く大勢うて向ふべ〳〵等閑うて当るべ〳〵ど籠城の士
必死の戦ひをぬ〳〵ら痛く防ぎ戦ひ義元大軍をたのミ
心驕く諸方のら攻勢を負〳〵一時よ此砦紙攻落さんと計ど

甚尋君逆兵を勝く旗本へ及へ義元と雌雄を決せんと悠
らくに歟小勝に乗て徒へなく多く味方の勝利ぬへ
義元を討ぞこも本國へ退陣べし信長此斗策に陥ひ
人まを引て丸根鷲津寺中鴫丹下等と七ヶ所の
砦忽築き兵士籠て義元の大軍を防んとせる由
義元即つくく諸士の容体を考る小今度の合戦味方
無勢なるを以て必定の勝利覚束なしとあやぶさ
るもありかくて合戦勇ある一ツの密計を出
列の六角義秀日義賢入道兼續と援兵を乞其物を合
せ今川と防戦みんとす上自後着に及人を引連て加
ん急ぎ々

義元即密謀歟に列
尾州海道鄙隘須臾の徒人小六政勝か諸國の壮氏士一る余
人を集め其物甚多く其を以久助日比壮六吉ま長にまを悪
牧助吉山彰七日小ヶ河口久助日比壮六吉ま長にまを悪
加次田隼人松平内匠等皆一人当千の勇士之本下義吉郎
幼稚の時より小六が許よ一手斗技指せられ居しが今度
に及へ説くて隊須賀村よる三吉小六が家に従て對面し小
六大ゐ悦び一別以来の安危を問ひ互ゐ細之義吉郎
密よ語りける今度駿列今川義元大軍を引率し上洛
せんと企る其序路くの歟國を悉く切ん之我國隣國
ろを以て亦よ合戦よ及ん之我も我國勢おるく無

友吉郎孫を
宝へめ
江戸よ
越く

ざらば味方のね士皆恐怖のさまあり依之列侯ゝ本六角義
秀よ助勢を乞て今川と雌雄を決せんとて某ゞ役を蒙り
今切切よ就んとて密よ計よ義秀柔弱ゝて兼禎入乃父
ひよ拙ゝ多の助勢の調よはゞ足下此時よ下の武士
を悉ゝ集めゞ列の援兵之と披露せば小田の軍勢ま力と雖
ゝ我ゝ勇力ゝん此後足下の助勢を乞むよ語りゞれい小六
角て義吉が恩幸を援辞なれば我及ぶ所にあらざるべきや
こ打吉の書信を通ゝて強ゝまうゞれば細ゝく記兼
ゝ日限を約ゝ誠知川の通うにゝく出舎をべきとやあいせ
義吉郎もゞ約ゞ出ゞゞ
義吉郎ゞ説ゞ六角兼禎

近江の国主ゞ角義秀よゞ其先宇田天皇の末孫弘多
佐ゝ木源義秀が男左郎左ゞ定綱より代ゞゞ列の主ゞ
ゝて観音寺の城よ居を弘治三年義秀幼稚ゞより叔父
右京左ま義賢後見人ゝて国政を執行ゝ後ゞ入乃ゝて援関
兼禎と号をゞよ永禄三年又月末下義吉郎小田の役
着ゝて観音寺の城ゞ入ゞゞ但ゞ雌雄ね乏を
義吉郎ゞ出ゞ但ゞ義秀執権兼禎
説意を演小田家援助の加勢を乞ひ今川ゞ雌雄ね乏を
窺の度ゞ河を隔ゝて若々ゞも兼禎許容のさまゞれ
ば義吉幸ゝて今度ゞ勿より小田を救ひの軍勢を出ゞた
まふい強小田一家の利のゞにあゞゞ語よゞる底破もゝく

義吉郎
依（よ）つて
業（わざ）頓（とん）と
説（と）く

園を〳〵信長今川のねぢ滅亡せば義元破竹の勢ひよて当国へ乱入をば統る財ハ当家の捨元之知るべう〳〵今信長へ接兵を賜ひ小田の軍を助け給ひ信長記力をそ〳〵防戦一たゝ国やぶれ一家亡るとも今川の勢大き〳〵の強く〳〵是へ自然信長勝利を得ば江州の保こゝ泰山のおそ〳〵害をなさゞらんおまよ助け保ちて両国和のぜひ〳〵ども唇歯の国なれば安堵なる〳〵べし然〳〵此利害弁ふ〳〵ぢ義秀ひ若年なの病そ国政よもつ〳〵ぢとゝくども頗寛仁よして大度あり義をそ〳〵ぢ悪〳〵理に中り其いよ〳〵名命を私う〳〵めざるすし賀弁感〳〵接兵を出〳〵信長と頼ひ

ふ乞ねなんしども入る義顕愚おもてゝみ承引せば義元其その旗名物弓鉄炮の軍兵二万斗稍備の後仍分られ下され度某徒〳〵も信長の命をそ遂〳〵当家へ後をそなし許容ひしそれ後国政の具足をかく〳〵しの具足をそ着せ旗の具足をうびせ刀の接兵之と仍り味方の勢を励ま今度の合戦今川を討破らんそ信長が方すよこれありなれ此両条許〳〵強れと好びひそれが流石の義顕もおそや思ふ通りよへきたべ〳〵とひ〳〵ぢて退さる

江戸の援兵尾張より

江州攻兵衛尾張小田の役者木下藤吉郎
云ふより加の國を立ち南義を
が才智人の秀一を深く感じ其後藤吉郎をそく招き
於汝いうる人のる孫ちろやが我深く汝が芸事に驚く今
より後義を結んで変をとるとも我れ才藏多病にて
死世よりるとも汝ら馬の勝手を戈をえて人と地を争ふ
かくの如くも先祖より物ひくれ申さく人にて恥ぢを雪
らび我祖源義秀義の一字をえて木下藤吉郎秀吉と
名乗功名終世にわをよべ藤吉郎秀吉
後吉よりんが後吉落涙して悲を謝して尾列へ帰
早々時より兵にて中合せ小六が一党約束を違へず

其勢部合一る三百余人舩乗組川へ出向ひそれが後吉大き
よ驚び伴の奥ふを名せ旗指物を押立名佐へ来家
の加勢ちろと拠りいさんで入国しろうそれが小男乃諸
士いつも変ちろ外の百姓までで信長卿の武徳めでと
く佐へ本の加勢ぬりぬまでば今川ぶ大勢拠ってそら
びと街より出て躍り驚び国家長久とぞ祝しろ後吉
江州の次第弐ぶをかくの如くなるは一洋よ云よ
それが信長卿甚ぶ感悦まして
ぞと称ぶ拠ひ先佐へ本家より実の援兵に来りしこと
被露拠ひ密よ後吉と計策を定めて今川を討破
らんといさぶ拠よ後吉即信長卿に告てやよける

いづくへの勢法家三郎義秀ら法せい我軍ならんと義秀
い逃倒して秀吉といふ
今川義元屯摘捉間
扨も永禄三年五月十日今川治部大輔義元俘豆駿河三
河遠江の軍勢都合已万五千余騎にて五万余騎と披露
し一日十八日の海表摘捉間を本陳として先小田井の岩九
根鷲津を攻落んと急ぐ有ける
山々そびえたるをいや小田の城今川の大軍ら恐を一方
危きら限り已鷲津九根の砦今川の大軍ら恐を一方
戦叶まじと思ひ入れば御力をえて敵の勢を信長卿へ告ふ
ら指の歯を引ぐ〳〵信長卿へ告ふ軍急あり

いへ名乗改むべしとて国次のかたを我ら与へ某元来化国の
ら名乗改しべきいわれなき辞退をべき者
の和光此度ら一角家の実の加勢にあらばとても今川の大
敵を討破る陰にもべくと其ら旨を含めて退きら出ら若乃
よりびと懇と其ら旨を含めて退きら出ら若乃
御下知ままに仕らべ〳〵とて一角ら賜ひより国次の刀
を信長卿へ指出し名乗改しが信長卿御手ら取又
ら功なり他国のまさりとて賜るものぞらびに改名して
指足と仕ろふぞ先ら名乗ら秀吉と改ろる人ものて
改名の者を見ら者言て某小五ろりて勇手ら足

今川義元
桶挟間ヲ
屯ヲ

必勝の戦を心ふかゝ給ひ「ゆめ」も驕き給ひ其後法をもさゝく酒宴をもよほし軍の評定ばかりこゝろ掛給ひ信長ごう〳〵慶を開き人間終に不生死猿楽ばかりこゝろ掛給ひ信長ごう〳〵慶を開き人間終に不生死幻のおこなひなる一度ほとゝぎす聞てこそ滅ぬりのこゝろみべき中〳〵敦盛の曲舞を押えて〳〵再三うたひ舞給ひ酒宴の真を尽し〳〵給ふ漸夜も三更の比御下知の如く手ゝる海の要害丹下二ヶ所の砦いと静かのね元の切和之曽闇乃宴守るも叶まじ柴田勝家坂井右近名古屋弥五郎ホ一る余人を率〳〵丹下小の砦をもるべし」依之間信忠池田恒興二郎丹羽五郎左衛門森三左衛門尉一る余人を引て丹下南の砦を固むべし我自ら引て後て出陣をもべし」と令下知給ふ各令承〳〵

て座を立退きけるが柴田勝家諸士はのひ今度の合戦城ゝ味方のねがふ所なり君戯の御詞よ一度生死更滅せぬ者のみべきと抑えて〳〵てうひ給ふ所なり今日の合戦余限りよ戦へとのこゝろ名べ一人〳〵力を一致ふ〳〵粉骨細身一世の勇名此時なり進ゝ給へ寺と馬よ鞍よ出ゝ〳〵催うおしも

軽忙なり「進ゝ」の勇ゝしうもそなふる

城

明ゝば廿六日九根就ゝ給ふ合の戦ひみべ〳〵とその用意匠ゝこゝ家ゝ一箇の小城あり信長の小姓衆よ家田太郎代さしも強勇の壮士之ゝしどゝ人本石にあらべば生死の境ゝるまぐ〳〵奥方の中ゝ芳野とゝる女を頃間乃ゝ意の山路のあるる

太右代
たもとの
娘よ
とうとく

べく〳〵命も今は終らんとて人給なりけるぞ〳〵哀の玉章なまくらの一夜逢瀬の情をとゞめんときの今日もおその日も逢坂とうたひんねを恨こゝろしげき思ひも流こゝろしげき女も今は心解繋きて人間を思ひつゝ添臥契りをこめにある此比山渕九郎次郎来清渕よみがるゝ大荒代が苦勞を密通せつゝ茶道祐甫をかたらひて大荒代が不義を訴へ信長公に聞ゆ大荒代元来色と酒とを好く服を肥すなり大荒代が酒と乱るゝ酣男よ淑ざれば甚欲きなり婬をしぶも甲斐なし時は今幸今川義元上洛して小田一家を討伐のよし其後へ陥るべきと急ぎ本下山村命を捨て功をたゞんが何の財を残すべきと急ぎ本下筈ある家にもあり今度の合戦を討死の勲ありきと免さるゝが何程の誠ぞ其後へ陥るべきと急ぎ本下城中に誘ひ入戦をおこなはんと節操を感じ

今川義元陣列

今川方のまうけの津の城へ岡永伯耆守氏繁勅禁小三郎康秀を大将として其勢一万余騎二番備へ三浦左衛門義次又多余騎元より続く九根の城へ待受荒人郎保を勢又百人義元の加勢唐衣後守一万余騎二番を筥山伯中守又余騎元より続て打立義元の旗本一万余騎其人くしい江間関口里弥富塚遠弥朝

佐奈石海の砦を大将を守備〳〵おくり二股の城主松井五郎八
三百余人幸隆の左へ備へ今川の家老朝比奈泰熙中守之百人
して右後備へ多昌景しが明日は只一息よ踏潰さん
と望るを遮〳〵と結居さる五月十九日の朝まだ東雲のころ
より今川勢三万余騎駿の津九根の両城を取捲のおく〳〵え
囲ど只一揉よ戦破んと裏をもしらず攻おり〳〵九根のもり佐久間
大学元素強勇の士ぢりぐしが大欲をかも恐るに厳〳〵く
防き戦ひくる〳〵駿の津の大将小田玄番恐飯尾近江守今川
が大軍よ恐怖して防禦の使も墓〳〵しからざるぐしが寡多
勢ひ寄んよ〳〵て既よ駿の津落城せんとはよ九根の佐久間
大学よ矢倉ひ出よ遥よ駿の津の合戦を見物太郎代を

られて叔い〳〵む太郎代元来必死の合戦ひ意を揺むも
なく只一騎九根を切出て大欲を遠ぎ既よ駿の津へ逃行
くる我るよ駿の津の城よく退去〳〵て主君小田玄番飯尾
近江守中務の城へ志を勢ひよく退
遥よ〳〵残兵と只一人援合より勇を振よて突立けもが
勝誇る今川勢なれども太郎代一人よ援を討ち鑓ざ立
て進ど得ぢ小田玄番ぐしを見て味方討をる悔せよく太郎
十人ぢて只太郎代が詞にを添ひ勇をふるよて戦ひくる家よ
今川の臣岡永伯者ものが組下に松山新吾ぐう大剛の荒武
者代ら働き心よしと称称を揺ど太郎代い欲を揺ど
齒るを幸切立くるが松山新吾ぐしと称を合

なさよ
大将代
敵将を
斬る

繪本古圖記巻之五終